「コヨット!」企画で、外でのびのびと遊ぶ子どもたち。

リサーチ「被災地のいま」

子どもたちを取り巻く状況

東日本大震災や東京電力福島第一原発事故は、子どもたちのくらしにも大きな影響を及ぼしました。避難生活を余儀なくされている子どもたちや被災で親を亡くし孤児や遺児になった子どもたちなど、子どもたちを取り巻く問題も山積しています。

少しでもほっとできる時間を

「放射能の風評被害は早くなくなってほしいけれど、震災が風化して、私たちのことが忘れ去られてしまうのも不安です」

被災地の方々は、異口同音にこう話します。特に放射能の問題は、子どもをどこで産み、どこでどう育てるかに関わりますが、正解は依然として見つからない状況です。

そうした、親も子も不安なくらしを続ける中、福島県生協連が主催する「福島のこども保養プロジェクト（コヨット!）」のイベントは毎回好評です。イベントに参加したお母さんたちからは、「ここではホッとできます。普段の生活では、ご近所の方やおじいちゃん、おばあちゃんまで、みんなの意見が違うから混乱して疲れます。外で遊ばせていいのか、悪いのか、福島で暮らし続けるのか、引っ越すのか……。子どもたちのためには納得した選択をしたいのですが、難しいですね」「いつも、一つひとつの行動に対して、放射能の影響を考えてしまいます。何も気にしないでバーベキューなどができることは、ありがたいですね」などの声が聞かれました。

放射能問題の収束にはまだ時間がかかります。こうした取り組みを今後も継続していくことが大切です。

福島支援交流会（本誌P25）では、「コヨット!」参加者の平井華子さんより報告があった。「子どもたちが福島を大好きになってくれるよう、心から支援よろしくお願いします」

約1、700人が震災で孤児・遺児に

内閣府の『平成25年版少子化社会対策白書』によると、震災の被害で両親を亡くした孤児は、13年3月1日現在で241人（岩手県94人、宮城県126人、福島県21人）、父母のどちらかを亡くした遺児は1、483人（岩手県487人、宮城県857人、福島県139人）とされています。ほとんどの子どもたちが祖父母など親族に養育されていますが、将来を心配する子どもの不安が問題になっています。

復興庁や文科省、厚労省などの省庁、各種のNPO法人・ボランティア団体なども支援を続けていますが、あるボランティア団体のスタッフは「受け入れた祖父母たちが限界に達しているケースもあります」と指摘しています。受け入れた側も被災者であり、仮設住宅で生活しているケースが多く、経済的な不安を抱えているからです。

「受け入れた方々も、ここまで負担が大きいとは考えていなかったはず。政府の対応も進まず、いら立ちが募り、子どもたちに手を上げてしまう人も少なくありません。解決は急務なのですが……」

多くの子どもたちが、家族を亡くしたショックや将来の不安というストレスにさらされています。子どもを対象とした新たな支援が求められています。

（文　荒川和巳）

福島県生協連は、長期休暇を利用した「コヨット!」県外受け入れ企画を、全国の生協に呼び掛けている。写真は、13年2月22日に行なわれた、県外受け入れ企画スタッフ研修会の様子。